

荒木恵作 「み心」

<前編>

- 受験生 (直哉の夢の中。合格発表を見てガヤロ々に)「キヤー、やったあ！」「あるよある！」「うれしい！」
- 後藤直哉 や、やめてくれ！（ガバと起きてハアハア息遣い）夢か…。
- ナレーション このところ同じ夢を見る。それはもう 3 年も前の大学受験の時のことだ。なぜいまだにおれはこの夢を見るのだろうか。おれ、後藤直哉。S大の 4 年生。そろそろ就職活動に身を入れなきゃならないんだけど、まるで手につかない。おれの人生は、あの 3 年前の受験の時に終わってしまったような気がして。今のおれは、何かミスキャストの役者が嫌々ながら柄でもない役を演じている、そんな感じなんだ。おれの家族は、父と母、そして弟が 1 人いる。この弟っていうのがまだ小学 4 年生。年が行ってからの子供だから、親は目に入れても痛くないというくらいなんだな、これが。ま、そのお陰で親の関心は専ら弟の方だったから、おれはこの 3 年間、好きなことをやってきた。でも何でこのごろあの夢を見るんだろう。
- 先生 …というわけで、従軍慰安婦問題は今もなお続いているんだな。何か質問がある者は？
- 根岸はるか はい。先生は先ほど、従軍慰安婦がもっと早く名乗り出てくれれば、この問題はとっくに解決されていたのではないかとおっしゃいましたが、出てこられない状況があったからだと思うのです。本人が恥ずかしいと思っているからだけではなく、国自体も、彼女たちが出てこられないような状況にあったのではないのでしょうか。
- 直哉モノローグ さすが根岸さん。鋭いよ…。
- ナレーション 彼女は根岸はるか。おれがこの大学に入ってから、ずっと片思いし続けている子だ。顔はもちろんのこと、頭も性格もよいという、おれから見ればパーフェクトな人だ。これほど好きなら、早く告白してしまえばいいと思うのだが、シャイなおれはずっとそれができないまま、3 年もたってしまった。
- 川村健太 直哉、何ボーっとしてんだよ。あ、また根岸のこと考えてたんだろ。
- 直哉 何言ってるんだよ。んなわけねえだろ。おれたちはもう 4 年生だぜ。そんなヒマあるかよ。
- 健太 またまた無理しちゃって。授業は終わったぜ。
- 直哉 う、うん。復習しようと思ってな。ノートしまわなかったんだよ。
- 健太 はいはい。じゃあこれから就職状況見てこないか。なんか今年も少ないみたいだけどな。
- 直哉 うん、じゃあ行くか。

ナレーション こいつは川村健太。同じ学部で、3年間共に過ごしてきた仲間だ。おれたちは向かいの后者へと足を運んだ。少ないながらもさまざまな会社の名前が書いてある。その中には大手企業の名前も幾つか入っていた。他の学部の生徒も必死に面接日などを書き写している。そんな彼らの姿を見ながら、おれの心の中は冷め切っていた。就職しようという意欲もまるでわかenかったし、こんな大学出たって、どうせロクな仕事には就けないという投げやりな思いが、ずうっと心の中を支配していたからだ。帰宅して早々に夕食を済ませると、おれはバイトに出かけた。週に4日近くのコンビニで、深夜アルバイトをしているのだ。

直哉 いらっしゃいませ。

お客 あの、つまみのイかなんかはどこにありますか？

直哉 はい。まっすぐに行ったところの右端にあります。

お客 ありがとう。

ナレーション バイトは、そうつらくはなかった。別に汗だくになって働く仕事でもないし、適当に休める。しかしおれはこんな生活を望んではいなかった。おれの計画では、第1志望のT大に入り、今ごろはもっとオシャレな所でバイトをして、彼女もつくて週末には遊びにっているはずだった。そう、バラ色の人生がおれを待っているはずだったのだ。しかし現実のおれは、三流のS大学。お金もなければ彼女もない。最悪な人生だ。

直哉 いらっしゃいませ。ああ今井君か。もうそんな時間？

今井幸男 そうだよ。お疲れ様。

ナレーション 今井幸男。おれと同じ年だ。おれは彼にコンプレックスを持っている。と言うのも彼があつたT大に行っているからかもしれない。お世辞にもハンサムじゃないのに、彼女もちゃんとして、その上真っ赤なクーペなんかを乗り回している。おまけに“自分はいかにもエリートだ”という鼻持ちならない態度がどうも気に食わない。

今井 後藤君、今年も就職大変みたいだね。そつちの学校はどう？

直哉 うちも同じだよ。でも結構今井君なんかは、すぐ決まっちゃったりするんじゃないのかな。

今井 まあね。今のところぜひ来てほしいっていう会社が3つほどあるけど、大したところじゃないんだ。もっといいところがないかなって探してるんだよ。

直哉モノローグ やっぱりな。今井のやつ欲張りやがって。ムカツクぜ。

今井 そうそう。君もし決まらなかつたら、どれか分けてあげてもいいよ。

直哉モノローグ ふざけんじゃねえよ。自分の仕事ぐらい自分で探すよ。

ナレーション 今井の言葉にいらだちを覚えながらも、正直うらやましいという気持ちがおれの心の中にはあった。世の中どうして不公平なんだ？ “しょせんおれは三流だ”という言葉が、頭の中をグルグルと回っていた。次の日の日曜日、疲れきって

いた体を起こし、時計を見てみると午後 1 時を指していた。おれはタバコを買いに外に出た。その途中、根岸はるかとはったり会った。

- はるか あら、後藤君。こんなところで珍しいわね。
- 直哉 あ、お、おれの家この近くなんだ。今起きてタバコ買いに来たところ。
- はるか そうなの？ 今日は寝て曜日なのね。でも知らなかったな、後藤君がこの近くなんて。わたしはね、今礼拝が終わって帰りの途中なの。
- 直哉 礼拝って？
- はるか 教会に行ってるの。今は引っ越しちゃったから教会からは遠くなったけど、電車で毎週来てるんだ。
- 直哉 ふうん、そうなんだ。
- はるか よかったら後藤君も今度いらっしゃいよ。
- 直哉 う、うん。行ってみようかな。
- はるか じゃあまた学校でね。
- 直哉 ああ、またあした。
- 直哉モノローグ そうか。教会に行ってたんだ。
- ナレーション おれは、3 年間ろくすっぽ口も利けなかった彼女が、また一步遠くに行ってしまったような気がしながら家に向かった。
- 弟寛人 あ、お兄ちゃん、どこ行ってたの？
- ナレーション 弟の寛人だった。
- 直哉 タバコを買いにだよ。お前は？
- 寛人 塾だよ。今日は英語の。
- 直哉 そうか。偉いな、勉強して。
- 寛人 やっぱりたくさん勉強して、いい学校に入りたいもん。今度テストがあるんだ。それで 95 点以上取ったら、お母さんがプレイステーション買ってくれるんだって。
- 直哉 ああ、欲しがってたゲームマシンか。よかったな。
- 直哉モノローグ おれもこのころから勉強していれば、あのT大に入れたかもしれないな。そうすれば今ごろおれは…。
- ナレーション おれの思いはまたそこに帰っていく。一体今までの 3 年間は、いや、今までのおれの人生は何だったんだろう。
- 学校では、いよいよさまざまなところで面接が始まった。リクルートスーツを着た学生が、緊張した顔を隠し切れずに歩いている。
- 健太 いよいよ始まりましたね。
- 直哉 そうみたいだな。
- 健太 何、人ごとみたいに言ってんだよ。お前もそうだろ？
- 直哉 うん、まあね。お前のほうこそどうなんだよ。
- 健太 おれ？ おれは再来週が最初だ。

直哉 何社ぐらい受けるんだよ。
健太 今のところ、20社かな。
直哉 え、そんなに受けるのかよ。頑張るなあ。
健太 何言ってるんだ。このくらい当たり前だよ。もっと受けるやつがいるんだぜ。
直哉 ふうん。おれなんか今のところ3社だもんな。入れればどこでもいいしよ。入れなくともいいんだ。
健太 チョーやる気ねえな。そんなこと言ってたって、本当に決まらなかったらシャレにならないだろ。
直哉 うん、まあね。
健太 “うん、まあね”じゃねえよ。ほんと、頼むよ。しっかりしようぜ。
ナレーション だが、本当におれはどうでもよかった。別に入りたい会社はないし、したいこともない。今歩んでいるこの道は、昔思い描いていた道とは全然違う。最低な道だ。もうどうなったっていい。(間)その夜は、久しぶりに家族全員で夕食を囲んだ。
母 お隣の由香里ちゃん、今日就職の面接受けてきたんですって。すごい数だったらしいわよ、応募者。ところで直哉は決めたの、受けるところ？
直哉 まあね。
父 “まあね”じゃないだろう。4年生の大学に行ってプー太郎じゃ、話にならんぞ。
直哉 分かってるよ。
母 まあ、ちゃんと決まってくればお父さんもお母さんも文句はないんだから、しっかりやりなさいよ。
直哉 うん…。
寛人 僕がお兄ちゃんぐらいになったら、たくさん会社から「着てください」と言わせてみせるよ。
父 期待してるぞ、寛人。
母 全くこの子ったら。(笑い)
ナレーション 家族の笑い声を背に、おれは一人立ち上がり、自分の部屋へ入っていった。
直哉モノローグ しょうがないじゃないか。やりたいことが何もないんだから。どうせS大は就職が厳しいさ。T大にさえ入っていればこんなことにはならなかったのに。T大に入っていれば…。
ナレーション その夜、おれは、またあの夢を見た。
(「キヤー、あった！」「あるよある！」「やったー！」「万歳！」など)
直哉 辞めろ、やめてくれ！(荒い息遣い)チクショウ！

<後編>

ナレーション またあの嫌な夢を見た翌日、眠気を押さえながら学校に行く途中、おれはこううんにも根岸はるかにあった。

はるか おはよう。

直哉 おはよう。あ、ごめん、この前教会に行けなくて。

はるか ああいいのよ。来られるときに来て。この時期って就職就職ってうるさいでしょ。気がめいているんじゃない？

直哉 いや、そんなに真剣に考えてないんだ。なるようになるだろうし。

はるか そうなの？ でもせっかくこの大学に入ったんだし、やれるだけのことはやらなくちゃ。

直哉 うーん。でも入りたくて入ったわけじゃないし、どうでもいいんだ。

ナレーション はるかはしばらく黙っていたが、突然メモ帳を取り出すと、地図を書き始めた。

はるか ここが花屋さんで、まっすぐに行くとこの前会ったタバコ屋さんね。そこを右に曲がって道なりに歩いていくと教会があるから、今度の日曜日ぜひ来て！ 屋根に十字架があるからすぐ分かると思う。じゃあね。

ナレーション おれはしばしばう然として彼女を見送った。それから、彼女が書いてくれた地図をポケットに突っ込み、学校に行くと、健太に誘われて就職状況を聞きに行った。本当にこんな状態にいる自分が嫌だった。こんなところであがいていたってどうにもならないんだ、という思いがおれの頭から離れなかった。しかし、とにかくおれは面接日を聞いて受けることにした。

そうこうしているうちに日曜日になった。今日こそは根岸はるかに誘われた教会へ行かなくちゃいけない。行かなければ、今度こそ彼女の信頼を失ってしまう。そうしたら、もう彼女は永遠に高嶺の花だ。

直哉 おはよう、母さん。

母 あら、おはよう。珍しいわね、日曜の朝こんなに早く。どうしたの？

直哉 おれ、出かけてくるから。

母 そう。どこへ？

直哉 教会。

ナレーション あっけにとられた母の顔を背に、おれは外に出た。右手にはこの前はるかに書いてもらった地図を持って。

直哉 えっと、ここがタバコ屋だろ？ それを右に曲がってまっすぐ行くと… あ、会った。あれかな？ ほかに十字架が載っかってるのはないもんな。

ナレーション さすがに初めてなので緊張し、なかなか教会のドアを開くことはできなかった。10分ほどその周りをうろうろしていると、根岸はるかがやってきた。

はるか あ、後藤君。来てくれたんだ。でもどうしたの、こんなところで？

直哉 いや、入りづらくてさ。待ってたんだよ。

はるか そうなんだ。じゃ一緒に入ろう！

ナレーション 玄関を抜けると、小さな部屋が幾つかあって、ある部屋には、小学生ぐらいの子供が10人ほど集まり、勉強みたいなのをやっていた。少し奥まった部屋に案

内されたが、落ち着かないのでキョロキョロしていると、一人の男の人が近づいてきた。

三木牧師 よくいらっしゃいました。わたしは牧師の三木です。

直哉 初めまして。後藤直哉といいます。

牧師 いらっしゃい。根岸さんから聞いて、いつお見えになるかと待ってましたよ。

直哉 え？ あ、それはどうも…。

牧師 うちの教会の吉岡君も大学4年です。紹介しましょう。吉岡君、ちょっと。

吉岡信吾 はい。

ナレーション そう呼ばれた彼は、背の高い、人当たりのよさそうな青年だった。少し遠いところにあるK大に行っているということだった。礼拝の間、彼は隣に座って、勝手に分からないおれに何くれとなく世話をしてくれた。

牧師 では説教の前に、今日は根岸はるかさんにあかしをしてもらいましょう。

直哉モノローグ え、はるかが話すんだ… あの、あかして何？

信吾 神様がどんなすばらしいことをしてくださったかを、みんなの前で話してくれるんだ。

直哉 ふうん。

はるか 皆さん、おはようございます。わたしは、皆さんも知っているとおおり、S大に通っています。今日初めて来てくださった後藤さんはクラスメートです。わたしが神様と本当に出会ったのは、大学2年の時でした。それまで友達と一緒に教会には来ていましたが、別にただ来ているというだけで、お話もよく分かりませんでした。高3の時、音大に行きたかったわたしは、困ったときの神頼みという感じで、音大に入れるように神様に祈っていました。しかし結果は不合格でした。それでもあきらめられなかったわたしは、浪人することを決心したのです。それからの1年間、毎日バイトで疲れた体をむち打って、厳しいレッスンをするという日々が続きました。そして、今度こそと思って受験したのですが、結果はまたも不合格でした。もう何もかも嫌になったわたしは、どうなってもよいと思い、父が探してくれたS大を受けることにしました。受かったものの、行きたい大学ではなかったもので、心から喜ぶことはできませんでした。

ナレーション 知らぬうちにおれは、はるかの話に吸い込まれていた。彼女とはあまり話す機会がなくて今まで知らなかったけど、こんなにも自分と似た道を通ってきたのか。

はるか 入った当時は何もかもがつまらなく、無駄なことに思えました。しかしそんなある朝、聖書を開いて読んでいた時のことでした。その中のある一節が心の中に飛び込んできたのです。「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。」(箴言16:9)これを読んだ時、はっとしました。そして気づいたんです。これが神様のみ心なのかもしれないって。確かに行

きたかった音大に2回も落ち、行きたくない大学に入ることになったけど、このことを神様はよしとされているんじゃないかって。そう思えたとき、本当に感謝して今の状況を受け入れることができるようになりました。今は心から大学生活をエンジョイし、将来のことも神様にお任せしています。

牧師 ありがとうございます。皆さんはどう感じたでしょうか。根岸さんのように、自分の願いとは別の方向に進まなければいけないとき、そんれを喜んで受け入れるのは大変難しいことです。しかし皆さんのことを神様はとても愛していますから、ひどいことをなさるはずがありません。あなたのためにいつも最善の道を備え、歩ませてくださるのです。いかがでしょうか。このことをあなたは受け入れることができますか？

ナレーション おれの冷め切った心の中に、一瞬温かい風が吹き込んだような気がした。

直哉モノローグ 今が最善？ 神様がおれを愛してる…。

ナレーション はるかの話に続いて、牧師さんの説教は、イエス・キリストが十字架にかけられる時、神の「み心」を求めて3度も祈ったっていう話だった。初めての話でよく分からなかったけど、キリストも、“できれば逃げ出したい”という思いと必死に戦って、最後には、神のみ心に全部任せて、十字架に向かったという。あの残酷な十字架が、神のみ心だったなんて、おれには理解できないけど、でもあれがなければ、キリスト教も、教会も、クリスチャンたちのいろんないい働きもなかったわけだ。するとやっぱりあれは最善の道だったのか…。礼拝が終わってからも、そんな思いと、自分自身のことに関心を巡らせて、しばらくの間おれは動くことができなかった。

信吾 後藤君は、今の生活に満足してるかい？

ナレーション 吉岡君にそう聞かれたおれはざくりとした。彼までおれの心の中が分かるのかと思ったのだ。そしてなぜか、それまでだれにも話したことのないおれの悩みを、彼に話して見たい気になった。いつの間にか、はるかもそばに来ていた。一息大きく吸い込むと、おれは2人に自分の心の中をポツリポツリと話し始めた。

直哉 今までおれは、今日話してくれた根岸さんと同じ状況だったんだ。なぜT大に行けなかったのかってことばかり考えてた。T大に行っていれば、もっとすばらしい生活が待っていたのにつてずっと思ってた。

信吾 うん。…で、今は？

直哉 話を聞いていて、はっきりとじゃないんだけど、何となく違うんじゃないかなって思えてきた。

はるか そう。それに気づいただけでもすごいと思う。わたしたちってさ、なんか自分の願いがかなえられないと、そのことにずっと捕らわれて、先に進めないときってあるんだよね。それに捕らわれることで、現実から逃げることができるから。

直哉 現実から逃げる？

信吾 うん。僕も思うんだけど、やっぱり逃げてるんだよね。でもさっき言ってたように、僕たちの道を確認なものにしてくれるのは神様なんだ。だから今の状況は自分にとっては納得いかなくても、神様から見れば、僕たちにとって最善の道なんだ。だから僕たちは、神様に視点を変えてもらう必要がある。パラダイム・シフトだね。そこから後藤君にも新しい道が開けてくるよ、きっと。

はるか そう、自分が変わったとき、現実が変わってくるのよ、後藤君。

ナレーション なぜか知らないけど、胸がジーンと熱くなるのに、おれは驚いていた。それは、長い間できなかったパズルに、最後のピースをやっとはめたときの感動に似ていた。

直哉モノローグ 今が最善… み心は最善か…。

ナレーション おれは、心の中でそっつつぶやいた。もうあの嫌な夢は、二度と見ないだろうと予感しながら――。

(完)